

---

# 僕らの誓い

緋花李

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕らの誓い

### 【Nコード】

N5747S

### 【作者名】

緋花李

### 【あらすじ】

争いもなければ平和もないこのセカイ。

いや、平和なのかもしれないが、人間たちは何かに恐れてる。そう  
『何かに』

帝都でのんびりと傭兵をやっている『ロア』。基本的な仕事は雑用ばかり。戦いは本当に稀だし、旅の護衛も最近は滅多になくなった。それは争いが無いセカイになりつつあると言う事だ。

騎士団が消え、王がいなくなった城はただの飾り。国を治めるの

は政府の人間。政府が何をやろうと、民衆の知ったことではなかった。

そんな日常に突然厄介事が舞い込んでくるとは 誰も気がつか  
なかつただろう。『ロア』以外は。

この物語は私のブログにも載せています。こちらに載せさせて頂  
いている物は手直しをしています。

## 第一話（前書き）

新連載『僕らの誓い』は様々な絵師様からキャラクターを提供していただきました。

これから彼らをつまく動かせるかどうかは分かりませんが、全力で取り組ませていただきたいと思います。

よろしくお願いします！！

## 第一話

「まてえ！　こんにやろおお！」

肩で息をしながら薄暗く狭い街路字を駆けていく。乾いたレンガでできた石畳が、俺たちの靴の下で大げさな音を立てて鳴る。狭いから、音が反響してるんだ。

俺の目の前にはちっこい犬。

なんで犬を追っかけているのかって言うと、今回の依頼はこの犬の捕獲だからだ。

物凄く稼ぎは少ないけれど、しかたがない。俺は依頼主の顔を思い出して少し消沈した。

そうだ、これも食うためだし。

「あの犬ところ……捕まえたらみじん切りにしてやるう……」

「よせよ、リリー。一応あれ、依頼品だからな？」

「わかってるけど！」

隣で肩まで届く銀のセミロングの髪を振り乱して走るリリーが網の細い柄を折れてしまいそうなほどに強く握っている。外見はか弱い美少女に違いないのだから、もうちょっと女らしくすればいいのに。

それにすっげえ短いスカートも……あんまり乱暴に走ると……その。

そうそう、リリーは俺の相棒で、本名は『リリーシャ』という。

なんか長いから俺は『リリー』って呼んでるけど。

もともと気が長い方ではない彼女はこの犬を追っかけまわすという単調な仕事に飽き飽きしているはずだ。

いつ魔術を発動させるか……それを考えると胃が冷える。

俺がそんなことを考えている間に犬はちっさい隙間に入ってしまった。

ここは流石に人は入れない。

「あー！ もうなんなの！？ 犬のくせに！！」

リリーはそう言い捨てると手で構えをとった。……て、いやいや  
まずい！

「古の神<sup>いにしへ</sup>よ。我に」

「わー！ 待て！ 落ち着け！！ ここ街ん中だから！ 魔術発動  
させたらマジでやばいからっ！！」

慌ててリリーの詠唱を止める。

たぶん、さっきの詠唱からして捕獲系の魔術『アジューン・ゲート』だろう。魔法陣にいくつもの柱を立て、その範囲内から敵を逃がさないようにするための魔術だ。範囲が馬鹿でかくて、とにかく危ない。なにもない平原なら別に構わないが、街中、となると話は別だ。下手をすれば、家の中とかに柱が立って、破壊するかもしれない。……ちなみに名前がまんまのは気にしない。なぜなら、魔術の名前は彼女が決めるからだ。

俺たち人間は、魔術のことは知らないし、使えない。

使えるのは『エルフ』と、そのエルフの血を譲る『ハーフエルフ』  
だけだ。

リリーはハーフエルフなのだが、自分では断固として『人間』だ  
と言い張っている。

……別に、ハーフエルフが駄目とかじゃないのに、なんでそこま  
で嫌うのが俺には分らない。

詠唱を止められたリリーが不満そうに俺を見上げてきた。そして、  
唇と尖らせて腕を組む。澄んだ青の瞳は釣りあげられ、ものすごく  
苛立っているっぽい。

「『アジューン・ゲート』使えば確実に捕まえられると思うんだけ  
ど？ このままずうっとあの犬っころの尻尾追うわけ？ 無理！  
絶対無理だって！！」

そう言っリリーは近くにあった石を思いっきり蹴り上げた。石  
はものすごいスピードで飛んでいき、犬が入って行った隙間にうま  
く滑りこんだ。

そして。

「きゃん!!」

……すげー嫌な声を聞いた。

どうやら石が犬に当たったらしい。

いや、俺たちが追いかけてる犬以外にもこの街には犬がたくさんいる。きっと他の犬にでも当たったんだろう。そんなうまい具合に犬に当たるわけがない。そんなことがあつてたまるか!!

だが、リリーは目を凝らして、その鳴き声がした方を凝視した。

そして、今まで仏頂面だったのがまるで夢であつたかのようにかわいらしい少女の笑みになる。

「よっし!! 当たったあ!! 行くわよロア!!」

「……嘘だろ、マジかよ……」

俺は少しだけ肩を落しながら首を振った。

ハーフエルフのリリーは物凄く視力がいい。

エルフってのは、人間には不可能且つ理解不能な技術、能力を持つ。魔術もそうだが、リリーのように、人間では絶対にあり得ない視力を持つ者がいたり、耳がものすごく良かったり、運動神経がすごかったり、知能レベルが半端なかったりと、とにかく凄い。

だから、たぶんリリーの言うとおり、あの犬に当たったのだろう。

ああ。どうしよう。依頼主に怒られないだろうか……

俺は大きな溜息をついて先に駆けたリリーの背中を追った。

「ご迷惑をおかけして、ほんとごめんなさいねえ」

依頼主はお得意様だったりする。丸々と太ったご婦人で、こういうちっこい仕事をよく俺たちに押し付けてくるのだ。……ある意味営業妨害なのではないだろうか。

「いえ、またお願いします」

「……二度と頼まないでよね」

目を回した犬を手渡しながら形だけの礼儀を述べた俺の後ろでリリーが小さく呟く。俺は少し小突いて「我慢しろ」と目だけで言った。

少し膨れたリリーはツン、とそっぽを向いてしまう。

「それにしても大変ねえ、傭兵さんも。お仕事、減ってきているんでしょう？」

「まあ、そうなんですけど」

心から言っただけの人。

犬を撫でながらそう言った婦人に俺は苦笑いを返した。

ここ最近、帝都で国王が死に、それを機に……なのかはよく分からないが戦争が終わった。国王の代わりに政府が権力を握ったらしいが、何一つとして変わったところはない。たぶん、これから変わらないのだろう。それに、変わったところで俺達には関係ない。正直なんで戦争が起こっているのかもよくわからないまま俺たちは戦場に駆り出されたりしていた。

どこの国とどこの国が争っているのか。どうして争っているのか。何が原因でそうなったのか。

ま、今となつては関係ない話だ。

そんな事を思いながら婦人の長話に耳を傾けていると、急に婦人の目が丸くなった。

何事かと首をかしげると、ぐい、っと後ろから髪を引っ張られる。

「いつて！？　ちょ、リリー！？　な、何してんだよっ！？」

「うつさい！！　目の前をちらちら……」

ぶつぶつと何かを呟きながらリリーはす、と短剣をとりだした。

……まさか。

「待て！　ちょい待て！！　なんでそうなる！？　落ち着け」

「一部分だけ伸ばしたって何の意味のないでしょ！？」

言っや否や俺の返事を無視してリリーは俺の髪の根元に勢いよく刃を滑らせた。



ぶつつりと髪が切れる感触が伝わってくる。  
途端、頭が軽くなって俺は少しよろめいた。

「ほら。これですっきりした」

振り返った俺に満足げに言うリリーが俺の黒髪を握りしめて笑う。  
一部だけ腰まで届くほど長かった髪が、弱弱しく握られているのを見て、俺は何だかむなしくなった。

「あらあ、いいじゃない！ そっちの方が男前よお」

「……………」

流石に声も出ず、俺は左右を女に囲まれて黙り込んだ。

## 第二話

「ん？ なんだ口ア。髪切っちまったのか？」

「せっかく長かったのに勿体ねーな」

婦人のところから仕事場兼自宅に帰ってきた俺を迎えたのはそんな二つの言葉だった。

後ろ手にドアを閉めながら溜息を吐く。

「うつせ。イメチェンだよ」

「どうせリリーシャにでも切られたんだろ」

笑いを含んだ声。少しイラッときて俺は思わず眉間にしわを寄せる。そして少し睨むようにして声の主を見た。

俺の目に映ったのは依頼を受けるために作られたカウンターに腰を下ろす綺麗な若草色の髪をした男。こいつはここ　メルスタリオンの仲間、ルイス。整った顔をしているのにニヤけたような笑みのせいで全部台無しだ。

切れ長の銀の瞳を細めたルイスを見るとなんか脱力する。こいつの女つたらしがあからさまに見えるからだ。俺は大きな溜息をついてうなだれた。

「いーだろ別に。俺の髪なんだから」

「ま、そりゃそうだ。正直すつきりしただろ？」

「……………」

確かにその通りなんだけど。

「でもまあ、ルビアン夫人の依頼、お疲れ。オレあの人苦手なんだよなあ」

ルイスの隣でカウンターに背を預けながら思い出したように言った男に俺は肩をすくめた。

「それ、その人の仕事終えてきたやつの前で言うことか？　つーか俺ら昨日も仕事に出てたんだから、普通マイルスとルイスの番だろ？」

「違いねえ」

そう言つて盛大に笑つたのはルイスではない。ルイスとまったく同じ顔をしている男　　ミスだ。

まあ簡単に言うといつらは双子。

ミスは笑いを引つ込めるとルイスと同じ若草の髪をぐしゃぐしゃと掻いた。

「だってあのオレ等のこと完全にメイドとか家政婦とかだと思つてゐるっぽくないか？　頼んでくる依頼は今日みたいな『犬探し』とか『物探し』とかしまいには『庭の掃除』だ。オレたち傭兵を何だと思つてんだよあの人……」

「でも依頼を寄こしてくれるだけありがたい。そのおかげで食つていけるんだから」

俺は婦人から受け取つた金の入つた袋をミスに放つて預けた。そして二人を通り過ぎてカウンターの左手にあるドアを開く。

「それ、父さんに届けておいてくれない？　俺、走りすぎて足ばんぱんなんだわ。部屋で休んでくる」

二人に視線を送りながらそう言つて俺はドアの向こう　　俺達の部屋がある二階へと続く階段がある少し長い廊下を歩きだした。

もうとつくに日は落ちてテーブルには温かい食事が並んだ。

リリーに部屋から引つ張り出されて連れてこられた俺はとりあえずイスに座り、スプーンをくわえてぼーっとする。リリーに叱られてしまうかもしれないが、何もする気が起きない。

あー眠い。すっげえ眠い。

俺の隣のイスが定位置のルイスがパンをかじつてリリーを一瞥した。

「んで？　なんかイラついたから切つちまったのか？　あんだだけ長い髪はある意味珍しいのに」

「何？　なんか文句ある？　ていうか物食べながらしゃべんな！」

もぐもぐと口を動かしながら言ったルイスにリリーの怒声が飛ぶ。でも俺の耳には入っては抜ける感じだった。3時間くらい自分の部屋で仮眠をとっていたから頭がまだぼーっとする。視界もなんだかぼやけている。

俺は向かい側に座り、ルイスを睨んでいる少女をぼんやりと見た。リリーはあんな性格だが、メルスタリオンのメンバーの中ではいちばん料理がうまい。そこはやっぱり女なんだよなあ。

そのリリーが作った飯はやっぱうまい。でもまだ頭が重い所為か、食事がうまく喉を通らなかった。

「どうしたんだいロア。随分眠そうな顔をしているね」

そんな俺を見かねた父さん。優しい栗色の髪を少し長くして緩く結び、シアンのローブを身にまとったメルスタリオンの社長のデイオがスプーンを置いて俺に笑いかけてきた。

眼鏡の奥の<sup>とびいろ</sup>鳶色の瞳が優しく細められたのを見て俺は曖昧に返事を返す。

リリーが「ごちそうさま」と手を合わせて席を立った。そして食器をキッチンのシンクへと持っていく。そして食器を洗いながら子供に言うような口調で言った。

「まだ眠いんでしょ？ 早くご飯食べちゃってよ」

そんなリリーの背中横目で見てマイルスが小声で呟いた。

「……少なからずリリーシャのせいもあると思うぞ？」

「ハア！？ どーゆー意味、マイルス！！」

耳聴く聞きとって勢いよく振り返ったリリー。そんなリリーを見てルイスが大声をあげて笑った。

「マイルスの言葉のとりだろ？」

「アンタは黙ってなさい、ルイス！ アンタのその口調むかつくだっての」

「ああ！？ なんだよそれ！？」

ああ。うるせー。

でもおかげで意識がはつきりしてきた。

とりあえずリリーの怒りに油を注がないように早く食っちまおう。  
俺は三人は完全に無視してスープを口へ運んだ。

リリーとルイスの喧嘩はしばらく続いた。もちろん殴り合いなんてことはしないが……リリーの場合は特別だ。危ない。いろいろと前にも何か話した気がするけど……リリーはハーフエルフだ。つまりは。

「喧嘩で魔術を使うなって……」

「うるさい！！ もう……めんどくさいな」

ダイニングの椅子に行儀悪く座り、長い銀の髪を掻き上げたりりー。そんな彼女を見て俺は大きな溜息を吐いた。

喧嘩の終止符はリリーの魔術の発動を俺たちが阻止したことによって打たれた。

家ん中で魔術を放たれてはたまったものではない。物が壊れるどころの騒ぎではない。家がぶっ壊れる。

俺がダイニングの壁に背を預けてそんな事を思っているとリリーが思い出したように姿勢を戻し、頬杖をついた。

「てかさぁロア。明日なんだけど……」

「わかってるよ。街の外の仕事だろ？」

リリーが一瞬眉間にしわを寄せた。そして俺の目を見つめてくる。  
俺もリリーの青い瞳を見つめた。

この習慣はいつから付いたのだろう。リリーがいつもこうして最終確認をするのだ。

『俺が壊れないように』

ちよつとしてリリーは澄んだ青の瞳を伏せて唇に笑みを浮かべた。その危なすぎる雰囲気をもとった笑みに俺は一瞬ひるむ。

「ま、あんたがおかしくなったら殺す気で行くから」

久しぶりに聞いた言葉に俺は思わずひきつった笑みを返す。

「そ、それは勘弁してくれ……」

16 やそこらで死ぬのはごめんだ。

俺の言葉を聞いて笑ったリリーにつられて俺も笑った。

俺は、リリーや父さんがいれば壊れないで済む。だってこうして俺に時間をくれるから。

俺たちの笑い声はダイニングを埋め尽くして、下の階のルイスに「うるさい」と言われるまでやまなかった。

### 第三話

まだ日は顔を出していない。だが、もつじき鳥が鳴き、日が出て、夜が終わるだろう。

自分のベッドに腰をおろし、部屋の東側に作られた窓の外を見て俺は欠伸を噛みしめた。

「なんでこんな早い時間に仕事に行かなきゃいけないんだよ……」思わず愚痴るが聞く者は誰もいないだろう。

ちなみに俺の部屋の左側はルイスの部屋。右側はリリーの部屋。たまにリリーの部屋から何かが落ちるようなドサっ！って音がある時がある。

その日には決まってリリーの機嫌が悪い。いつだったか忘れたが、何があつたのか聞くと、

『落ちた。頭打った』

なんて返された記憶がある。

……リリーは寝ぞう悪いからなあ……

俺たちの部屋は大体同じ構造だ。だからベッドとか、クローゼットとかは同じ。もともとあるこのベッドは大きいとは言えないが一人が寝るには十分すぎるくらいの広さだ。それにリリーは小柄だし、このベッドならある程度寝返りを打つても落ちない。

だいぶ小さい頃にリリーを起こしに部屋に行ったら布団からブランケットから全部ベッドから落ちていているというあり得ない光景を目にしたことも記憶にある。

なんでこんな昔を知っているかと言うと、俺とリリーは5歳か6歳くらいの時に出会っているからだ。

正直はつきりとした記憶はないが、父さんが「リリーシャがお前を連れて来たんだよ」って言っていた。

そう。俺は親がない。『孤児』だ。ちなみにルイスとマイスは親がいる。何でも二人は出稼ぎに帝都にきているとか。リリーは知らないが、父さんとリリーに共通点は見つけられないからたぶん孤児なのだろう。

ま、親がいようといなかろうとあんま関係ないけど。

「ロアー？　そろそろ依頼主さん来るー」

ドアの外からリリーの声が聞こえて俺はハツとした。

「あ、ああ！　今行くー」

寝ているであろうルイスたちを起こさないように俺は小さく、しっかりと返して立ち上がった。

そしてクローゼットから愛用の剣を取り出し、背に背負う。

これでいい。準備はできた。

俺はふう、と一息ついてドアを開いた。ドアの先には短剣をベルトに差し込んだリリーが待っていた。

「さ！　久しぶりにお金になる仕事だよ。張り切って行こー！」

「おー」

天井に向かってこぶしを突き上げたリリーに合わせて俺もだらりと腕を突き上げた。

今日の仕事は隣町　と言ってもこのセカイは街と街が離れて築いてある。土地はその国のものだけど、街道沿いに集落はほとんど見当たらない　におつかいだ。

依頼主は帝都のちよっとお偉いさんらしい。

政府の人とか何とかって父さんが言っていたような気もするが、俺たち傭兵は雇われればなんでもする。雇い主が誰であるとかあまり気にはかけなかった。父さんはそうもいかないんだろうけど。

ちなみに仕事の内容は、『隣町の町長に届けもの』と『魔物の発生状況の調査』だ。



届けものは傭兵の仕事じゃない、なんて思ったが仕方がない。

「さて、そろそろ出発しようかつ！」

リリーがぐ、っと背伸びをしてに、と笑う。

久しぶりに街の外に出るから楽しみなのだろう。

俺は少し唇の端に笑みをたたえながら荷物を入れるためのポーチの中から地図を取り出してリリーの目の前で軽く振ってやる。

「出発すんのはいいけど、地図に従って行ってもらうからな？」

「う……」

リリーは方向音痴でかなり行動派で、しかもおつちよこちよいだ。

……なんとも最悪な組み合わせだけど。

だから必然的に俺は地理に強くなった。相方がこれじゃあ俺が頑張らなければならぬ。

俺は小さく息を吐いてリリーの背中をトン、と叩いた。

「さ、改めて出発しようぜ。早めに仕事終わらせてルイスとマイルスに新しい仕事押し付けてやる」

「それさんせー！ てか、なんであたしらが今日の仕事受けなきゃなんないのよ。三日連続とか……給料増えるかな？」

少し目を伏せて顎に人差し指を当てた姿は儚げな美少女だが、言ってることとのギャップが強すぎる。しまいには「一気に10万くらいくれないかなー」なんて言い出した。

そんな相方に俺は少し目を伏せて肩を落とした。

「しゃべんなきゃかわいいのにな……勿体ねえ……」

隣町に行くまで何事もなく俺たちは街の門をくぐった。帝都に比べればかなり規模の小さい町だけど、ここもそこそこ栄えていたりする。この町の産業は主に木材を売ったり、山から採れた食材を売ったりだ。

陸地と海との面積比的に海のほうがでかいこの世界にはあまり山がなかったりするため、山の食材はかなり貴重だ。そのため、高値で売れたりする。

懐かしそうに目を細めながら隣を歩く相方<sup>リリー</sup>に知らず知らず笑みがこぼれた。

俺よりわずかに背の低い彼女は俺の目線からだど丁度きれいな銀髪が見える。

歩くたびに光を受けて輝く髪に俺は懐かしさを覚えずにはいられない。なぜだろうか

「ちよつと、何？ あたしの髪になんか付いてる？」

「へ？ あ、いや何でもなし。相変わらずさらさらだなーって」

「は？ 何ソレ」

呆れたように横目で俺を見るリリーに今度は苦笑いが浮かんだ。

……ほんと、しゃべんなきゃ美少女なのに。でも、そんな面があるからリリーなのかもしれない。

肩をそろえて住宅街の真ん中に作られた大通りを歩く。立派な石畳のこの道の先に、町長の家がある。前にも何度も来ているので怪しまれることはないだろう。

それにしても。

「今日は人が多いなー」

俺がそうぼやくとリリーが俺を見上げて、肩をすくめた。

「そうね。まあ、それもそうよ。ほら」

「？」

リリーの指差した先をみると山積みになった木箱があつた。箱には『マーノット行き』と書いてある。それで納得した。

「ああ……商品<sup>モノ</sup>を取りに来てんのな」

「そーゆーこと。各地から人が来てるんじゃないに決まってる」

リリーはそう言つてまた歩き出す。俺は少し大股で相方を追いかけた。

その際、路地裏から誰かが見ているような気がしたが、気のせい

だと思い、そのままにしておいた。

町長への届け物の中身は手紙と招待状だった。なんでも帝都が少しごたごたしているのを助けてほしいとのことだそうだ。

「そんなのワシの知ったこっちゃないわい。ワシはこの街を守ればそれでいいんじゃない。全く、帝都の政治家どもは一体何を考えるんじゃない！」

玄関先でいきなりそう怒鳴なれて俺は今にも何か言いたそうなりリーの肩に手を置いて困ったような表情を浮かべた。そして小さく「我慢我慢」と口だけで伝える。

さつきから俺たちにあたり散らしているのはこの街、『ダールド』の町長、グウェモさん。

腰も曲がり、杖を頼りに歩くやたらと長いひげが気になるただのじーさんなのにこの威圧感は何なのだろう。俺がまだかなり小さいころからこの人にはお世話になっているのだが、いまだにこの人の威圧感の原因は分らない。むかつしから何一つとして変わっていないこのじーさんはいったい何者なんだか……

「俺たちに言われても……グウェモさん」

「……それもそうじゃな。それにしても随分と大きくなったもんじやのう、二人とも」

低いところから俺たちを見上げてグウェモさんは笑った。

けれどリーはなぜか不満そうに　それでもどこか楽しげに首を振ってみせる。

「そんなことないよ、おじい様。ロアは男のくせにちっちゃいし」「な！？　なんだよそれ！？」

俺の手をさつと払い、にかつと笑ったりリーに俺は思わず反論の言葉を返していた。

確かに俺の身長は160で止まったけど……　気にしてることを

……  
「がはははは！！　こりゃ一本取られたわい。のう、ロア」  
「……そうですね」

肩を落とし、ため息をつきながら俺はそうつぶやいた。  
なんでいつもこうなるんだ。

一人複雑な心境をした俺を横目で見ながらリリーが「まあまあ」  
と俺の背中をたたく。もちろん、唇には笑みをたたえて。

この行動に絶対反省の心は込められてねえな……

そんな彼女に、もう一つため息。

目の前には大口開けて笑う老人、隣にはやにやと口元だけに笑  
みを浮かべている相方<sup>リリー</sup>。  
この状況を前にして、俺はいつたいどうすればいいのだろうか……

……とりあえず、返事だけは貰っておかないとな。

俺は空気を变えるように手をパン、と打った。そして少しばかり  
姿勢をただす。するとさっきの陽気な空気は一変。変わって流れて  
きたのは少しばかり緊張感の含んだ空気だった。

「ダールド町長、グウェモ殿。返答をお聞きしてもよろしいで  
すか？」

「……ふん。そやつにこう伝えよ。『ダールドは手を貸すほど暇で  
はない』と」

「おじい様、そんなこと言っちゃっていいの？　思いつきり喧嘩腰  
じゃん」

思わず口をはんだリリーに視線を滑らせたじーさんはふふん、と  
鼻で笑う。

「大丈夫じゃ。騎士団はもうおらん。政治家に騎士団に後れをとら  
ん強者を集める余裕などないじゃろ」

「その通り」

俺は姿勢を崩し、腕を組んで頷きながら続ける。

「政府は無駄な争いはしない。騎士団がない今、戦争をすれば駆  
り出されるのは俺たち傭兵だけじゃない　民間人の男たちだって

巻き込まれるんだ。そうしたら一気に信頼をなくすしな」

「……ほんと、ややこしいな……政府なんて、帝都の治安を守ってればいいのよ！」

頭を抱えたリリーがそう吐き捨てる。

リリーは考えることが嫌いだ。性格にそれが表れてる。だからだろう、リリーの魔術が広範囲に一気に攻撃を仕掛けるものが多いのは。

以前の戦闘の際に彼女が放った魔術を思い出して俺は思わず肩を落とす。

とにかく、一つ仕事は終わった。後は俺にとっては一番億劫な仕事

### 『魔物の発生状況の調査』

こういう仕事は一番面倒だ。普通なら研究家とかがやる仕事だが、今帝都の研究家は留守にしているらしい。だから、俺たちに回ってきたって話だ。

仕事があることはものすごく有り難いが、政府側から回ってくる仕事は大体傭兵の職とは関係ないものばかりだったりする。それでいて面倒で厄介なものが多いから本当に大変なんだ。

俺は小さく息を吐き、次の仕事を思っただけで肩を落とした。

## 第四話

「あーあ。結局こっちの方が結構地味なんだよねー……めんどくさ」  
「仕方ないだろ？ 俺だって嫌なんだから」

「魔物が出てきたらロアは引っ込んでいいわ。あたしが何とかするから」

グウエモさんの家から出て少し狭い路地裏を歩いて行く。ここを抜けると今回の調査の対象となる魔物が現れる場所へと通じるのだ。俺は強気なリリーを横目で見てからかうようにリリーの肩を小突く。

「リリー一人に任せて俺が無傷でいたことあったか？」

「う……」

いつもリリーが一人で突っ走ってしまうと大抵俺にまで被害が及ぶ。もしかしたら俺が戦った方が怪我しなかったんじゃないかなんてこともしばはある。まあ、最近は減っては来ているけど。

思わず言葉に詰まったりリリーの背中を軽くたたいて俺は笑った。

「大丈夫だって。リリーがいれば」

「……あたりまえじゃない。あんた一人に手柄なんてとらせないんだから」

唇を尖らせてキツと眉間にしわを寄せたリリーの言葉に俺は感謝した。リリーさえいれば、俺はきつと壊れない。……ただ、最後の言葉は余計だな。

やっと狭い路地裏から広いところに出た。街の外に抜けたりしい。周りは木々に覆われ、木漏れ日がきれいだな、と思った。

「さて……」

俺は背から荷物を下ろし、強引に手をつ突っ込んで『例のもの』を

引っ掛んだ。

俺のつかんだものを見て、リリーは首をかしげる。

「これ……何？　　うわ、何このにおい！？」

俺がとりだしたちよつとした缶に顔を近づけたリリーは慌てて鼻を覆う。

俺には何の事だかわからず、

「え？　そんなに酷いにおいか？」

とこつちが首をかしげる番だった。

「こえにゃんにゃの！？」

「ん？魔物の生態を知るために使う餌みたいなもんさ　　ああ、これ酒の匂いすんのな」

「あひやし、おしゃけによめにゃのよ！」

「何言つてんだか分かんねえよ」

涙目になって唸っているリリーを見て吹き出しそうになり、俺はなんとか堪えた。

ここで吹き出してしまえばリリーの逆鱗に触れてしまう。それは一番厄介なことに違いない。

とりあえず一度息を吸い込んでそれから餌を少し開けた草はらに放り投げる。

匂いがしなくなったのかリリーはやつと鼻から手を離れた。

「うう……こんなのが好きだなんてだいぶ変わった魔物ね……」

「まあ、人間も飲むしな。不思議なことでもないさ」

「あたしは嫌いなの！！」

「はいはい」

涙目になって迫ってくる今日の相方はちよつとかわいい。いつもこうならいいんだけどなあ……なんてな。

そんなことを考えているとリリーがす、と俺が放り投げた餌の方へ目をやった。そして俺の腕を引いて木の裏へと隠れる。

「な、なんだよ　　」

「しっ！　……誰かいる」

「へ？」

珍しい。リリーが俺より先に何かに気がつくなんて。

「……………」

す、と大きな目を細めてその目に捉えた相手を見つめるリリー。ここは視力のいい相方に任せた方がよさそうだ。

二人して息を殺し、茂みの奥へと意識を集中させる。少しして、茂みが動き出した。

「……………」

現れた『モノ』に思わず顔を見合わせる。なぜならそこに立っていたのは『少年』だったからだ。

「子供じゃなか」

思わず肩をなでおろし、息を吐いた俺に対し、リリーは拍子抜けたように口をあけていた。

少年は恐らく十二歳くらい。茶褐色の髪と紅色の大きな瞳が印象的だ。

「だ、誰かいるんですか!？」

おびえたように声を上ずらせて声を張る少年。見ればきよろきよるとあたりを見回している。

なんでわかった？ 俺の声、そんなにでかかったか？

「どうするリリー」

「……ねえ、あれ見てよ。あの子の腰」

リリーは俺の質問は全く無視し、少年の腰を指差す。半分飽きれ、半分諦めて、俺は少年を見やった。

距離が遠く、少年の腰に何があるのかまでははっきりとわからないが。

「銃？」

「そう。あの子供、あたしたちみたいな傭兵なのかもよ」

さすがだ。俺には見えなかったモノを完璧に見ている。やっぱり、リリーの視力は半端じゃない。



そんなことを考えているとふいにリリーが俺の頭に手を置いて下に押した。しかも思いつきり。突然のことすぎて対応すらできず、俺はそのまま地面に顎を打ってしまった。土と小さな石ころがやけに痛い。

「な、何すんだよっ!？」

「 出た」

「え？」

リリーの唇からこぼれた言葉に俺は眉を寄せた。まだリリーの手は俺の頭にある。その為動けずにいた。下手に動くと……いろいろ危ない。リリーの姿勢がいろいろ危ない。

だから俺は動かずにただ固まっていた。だが。

「!？」

森の中に響いた銃声に俺は無理やり頭をあげた。もちろんリリーは体勢を崩して尻もちをついたらしい。背中に「何すんのよ!？」と非難の声が飛んできたから。

でも、そんなことを気にしている場合ではない。

「さっきの銃声は ！」

俺の目に映ったのは銃を構える先ほどの少年と 魔物の姿だった。

「ロア、わかってるよね？」

いつの間にか立ち上がったらしいリリーが片膝について動かない俺の耳元でささやく。

それで一瞬飛んでいた意識が戻ってきて、俺は頷いた。

「……大丈夫。わかってるよ」

その答えを聞くとリリーは俺の隣に膝をついて様子を窺う。

「どうする？ 下手に出ていくと撃たれるよ」

忠告と言わんばかりにリリーは釘を刺してきた。確かに、危険極

まらない。

「んなことわかってるさ」

そんな事を話している間にも森に銃声は響き渡ってきて魔物が次々と倒れる。

少年の銃の腕は半端ではなかった。本当に子供か？　そう疑ってしまうほどだ。

魔物を避けながら、飛びながら、走りながら弾を撃ち込んでいく。だが、威勢良く響いていた銃声が突然止まった。

「弾切れかつ!？」

俺の言葉に素早く反応したりリリーは手で構えをとって詠唱に入る。隣で魔術を唱え始めた相方に俺も思わず参戦してしまった。

「あた……れ!」

荷物袋に入れていたナイフを魔物に向かって咄嗟に投げつける。

魔物に向かつて真つすぐ飛んだナイフは少年の頬を掠め、魔物の目に突き刺さった。

「ぐああああ!？」

醜い悲鳴をもらしながら葉のついた枝で目を覆う魔物。確かこいつは樹霊ウッド・ゴーストだったと思う。木のような姿をしながら木ではない。目があり、根で動き、枝で攻撃してくる。

負の思いが枯れかかった木に宿り、魔物と化したんだ。

「だ、誰っ!？」

少年がナイフの飛んできた方を振り返るのとリリーが詠唱を終えたのはほぼ同時だった。

「さあ、行くわよ　!!」

構えた彼女の指先から現れたのは炎でできた無数の矢だった。

その矢は少年を襲っていた樹霊に突き刺さるとその後ろにいた物にも突き刺さり、炎で燃やしていく。

「ぎゃあああああ!!!」

何体もの魔物の声は空高く響き渡り　消えた。

魔物を倒した俺たちは何とか残った足跡を書き写し、その死体が消えうせる前にいろいろと調べて森を抜けた　もちろん少年を連れて。

街に入り、広場に來たところでやっと少年が口を開いた。

「ありがとうございます……僕、替えの弾持つてくるの忘れちゃって……」

「……馬鹿じゃないの？」

「こら……」

冷たく少年を見下ろすりりりを<sup>たしな</sup>睨め、何度も頭を下げてくる少年に訊いてみた。

「なんであんなところに一人でいたんだ？　街の外は街道以外魔物が出るって知ってるだろ？」

「僕、人を探しているんです。それで、道に迷っちゃって……」

「人？」

ずっとそっぽを向いていたリリーがやっと少年に向き直る。

少年は頷いた。

「はい。帝都で傭兵をやっている『ディオ』という人なんですけど

」

「父さん？」「父さん？」

思わず声を合わせて言った俺とリリーを見て少年は目を丸くした。  
「父さんって、どういうことですか？　あの、お兄ちゃんたちはディオさんを知っているんですか！？」

いきなり詰め寄ってきた少年に思わず後ずさる。俺は曖昧に頷いた。

「ああ。ディオは俺たちの父親　っていつか社長だ」  
「へ？」

拍子抜けしたのか少年は首をかしげている。

リリーが見かねて説明しだした。

「だから、あたしたちはディオのもとで働いてるの！ でも、小さい時からそうだからあたしたちは『父さん』って呼んでるのよ」

「そうだったんですか……」

納得したように頷いた少年に今度は俺が尋ねる。

「で、なんで父さんを探してるんだ？ 仕事？」

「違います……僕、家族が最近死んじゃって、親戚の家に引き取られていたんですけど、その親戚も僕の面倒を見切れないからって親戚の家をたらい回しにされていたんです。でも、少し前にディオさんから手紙が来て……あの、僕とディオさんが親戚らしくて……」

「えっ？ 父さん、親戚なんていたんだ？」

「そりゃいるだろ……」

思わず突っ込む。たまにリリーは抜けているところがあるからなあ……

俺は一つ息をつき、少年に向き直った。

「じゃあ、行く場所は同じなんだし、一緒に行こうか。      名前は？」

「名前      僕のですか？」

「あんた以外に誰がいんのよ」

厳しい指摘をするリリーに苦笑いを送り、俺はもう一度少年を見、頷いた。

少年はそれに安堵したのか背筋を伸ばし、はきはきと告げる。

「僕はクレイといいます。よろしくお願いします……！」

## 第五話

森の中で会った不思議な少年『クレイ』ははるか北にある街が故郷だといった。

傭兵、と言っても俺たちは近場の場所しか知らないし、行かない理由は簡単だ。帝都とはいえども、貴族が集まる貴族街と市民街ではわけが違う。俺たちは市民街の傭兵だ。仕事を依頼してくるのは市民たち。貴族や政府の人間が俺たちを当てにすることは最近では珍しい。

まあつまりは。市民が頼む仕事なんてたがが知れていて。だから遠出はしないということ。

三人肩を並べて街道を歩いていると不意にクレイが口を開いた。

「あの、ロア兄たちは、傭兵さんなんですか？」

「そうだよ。まあ、今は傭兵の仕事なんてぼやってないに等しいけどな……」

クレイはどうやら傭兵に興味があるらしい。まあ、あれだけ銃が使えれば申し分はないけどな。

「あんたさあ、どこで銃なんか覚えたの？ 子供が覚えるようなものじゃないでしょ」

俺の右隣を歩いているリリーが俺を挟んでクレイに問いかける。確かにリリーの質問は俺も引つかかっていた。

クレイは少し首をかしげて記憶を引きずりだすようにうん、と唸りだした。

「……よく覚えてません……たぶん、お父さんだと思うのですが……」

「もしかして物心ついたときから銃握ってましたってわけ？ すこいね」

半ば疑うような口調で肩をすくめ、クレイを横目で見たリリーに俺は思わずため息をついた。

リリーはこんな風に子供だろうが大人だろうが容赦はしない。あの意味すごいことだが、ある意味では悪いところでもあるだろう。今もそうだ。言葉の端に現れた刺を隠すこともなく表に出している。普通の人間であれば顔をしかめて機嫌を害するところだろう。

だが、クレイは逆ににつこりと微笑んで頬を赤らめた。

「そ、そうですか？　ありがとうリリー姉」

「……………」

意外な言葉に面を食らったのかリリーは瞬きを何度もして困惑したように俺に視線を送ってきた。俺は苦笑いを返してリリーに耳打ちをする。

「……クレイは相当世間知らずで天然みたいだ」

「……そうね」

帝都に戻るまで俺とリリーはクレイから何度も質問を受けていた。「どんな所で働いているのか」「帝都はどんな所なのか」「ほかに働いている人はいるのか」……質問の嵐だ。家に戻った時にはしゃべり疲れて帰ったことを報告するのさえ億劫だった。

「たっだいまー」

俺の代わりにリリーが家中に聞こえるように言う。

日も傾き、赤い光が窓から差し込んで部屋の中を照らしだす。まだ電気はつけていない。それも手伝ってか部屋は真っ赤になっていた。

少しの間シンとしていたがたったと階段を下りて出迎えてくれたのは父さんだった。

「おかえり。お疲れ様　ん？　君は………」

父さんは俺とリリーの間に立つ少年に目をやる。

視線を受けたクレイは背筋を伸ばし、体をこわばらせた。

「あ、あの！！　僕、クレイです！！　お手紙、あ、ありがとう」

ざいました!!」

つかえながらなんとか自己紹介をするクレイ。その様子を呆れたように横目で見つめてリリーはさっさと部屋に戻って行ってしまった。

「まったく、まだ仕事が残ってるだろうに。」

「ロアも疲れただろう? 少し休んできなさい。報告は夜に聞くら」

「あ、うん。ありがとう父さん」

きつとさっさと帰ってしまったリリーへと送った俺の視線に気がついたのだろう。父さんはそう言っただけ俺に微笑むとクレイに視線を送り、椅子へ座るように促した。

父さんとクレイが二人で椅子につくのを目の端に捉えながら俺はドアノブを回し、応接間を後にした。

「え? 子供?」

俺が部屋で剣の手入れをしているとルイスが部屋に入り込んできた。

どつかりと俺のベッドに腰かけ、そしていつもの「美人さんはいるか?」というどうでもいい話を持ってこられしぶしぶ経緯を話している口挟んできたのだ。

口を挟んできたルイスに少しムツとし、俺は剣を鞘に戻しながらうなずいた。

「そう。子供。父さんの親戚らしいぜ」

「へえー……社長のねえ」

「なんだよ、疑わしいような顔して」

変に顔をゆがめたルイスに俺は首をかしげた。ルイスはうーんと腕を組み「だつてさあ」と呟いた。

「社長って家族構成とかよくわかんなくね? てか家族いんのかあ

の人。もともと若いころから傭兵でいなさそうじゃん」

「おい、俺とリリーは血はつながってなくても父さんと家族だ」  
「つとわりい」

けらけらと薄く笑ったルイスに俺はさらにムツとした。

……こいつと話しているものすごくいらつく。

俺が椅子に座って頬杖をした時、丁度開け放たれた俺の部屋の前の廊下をマイルスが通った。

「あれ、二人で何話してんだ？ 珍しいこともあるもんだな」

「ルイスが勝手に入ってきたんだよ」

「勝手にとかひどくねー？」

ベッドの上で唇を尖らせたルイスの正面の壁に背中を預けてマイルスは腕を組んだ。

うーん、姿はそっくりなのにマイルスとルイスじゃこうも違うんだな。ルイスが腕を組んでいるとなんだか締まらないが、マイルスが腕を組むと紳士的に見える。

……日ごろの行いの違いだな……

「で、何の話をしてたんだ？」

マイルスが俺に視線を送ってきた。

「あー、子供を預かることになったんだよ。子供」

「子供？」

「そう、子供」

マイルスが驚いたように目をみはるとルイスがくすくすと笑いだした。

「俺たち、子守係かもしれないぜ？」

「クレイはそんなにガキじゃねーよ」

「クレイっていうのか？ その子供」

マイルスの言葉に頷いてみせるとマイルスはふーんと頷いた。

ルイスは俺の「そんなにガキじゃない」発言に少し驚いたような顔をする。

そしてベッドの上に胡坐をかき、俺に質問してきた。



「何歳ぐらいの子供なんだよ」

「12歳とか言ってたぜ」

「結構でかいじゃん。なんだ、つまんねーの」

意味がわからねえ……

そつえばルイスは子供をいじるのが大好きで、よく小さい子を泣かせていた。

……今回はそうはいかないからな。何せ父さんの親戚ってことは戸籍上俺たちの親戚ってことになるわけだし。さすがにそれはなんかむかつく。

「ええ！？ クレイを働かせる！？ 嘘でしょ！？」

夕食の並んだ食卓で非難の声をあげたのはリリー。

食卓に全員がついたのを確認してから告げられた父さんの言葉に納得がいかないとでも言うようにリリーは父さんに詰め寄る。

「だってまだ子供だよ！？」

「リリーシャ」

父さんのやんわりとした口調に遮られ、リリーは押し黙った。その表情は困惑がいっぱいだ。

正直、俺はこうなるだろうなあと思っていた。今、メルスタリオンは人手が少ないのだ。実際俺たちもクレイよりも小さいころから仕事を請け負ってきた。

そう、つい最近 二年ほど前に終わった戦争の時も俺たちは兵士として参加していた。

二年前だから 14の時か。

「私はクレイの腕を見込んで話しているんだよ。さつき、小手調べに魔物を倒してきてもらった。見事な銃の腕前だ」

父さんは満足そうに頷きながらそう話した。

「へえ、お前銃使いなんだ？」

「あ、は、はい」

ルイスの好奇を含んだ目にクレイは少しひるんだようだ。そんなクレイを見てマイルスが呆れたようにため息をつく。

「おいルイス。クレイがビビってるだろ？」

「び、ビビってないですっ！！」

必死に弁解するクレイ。ああ、あれじゃあルイスのおもちゃだな

……

俺はそんなことを思いながらふと目の前の席に座っているリリーを見た。

彼女は今までに見たことのないような表情をしている。

どうしたんだ？

わからないまま俺は小さく首をかしげた。

## 第六話

何かがおかしい。俺はそう思いながら相方の背中をぼうつと見つめていた。

今までに見せたことのない表情。

気になる。とくに気にしたことなどなかったけれど、今回はクレイのこともあるし、なんだか気になる。

（後で聞いてみるか）

俺はそう決め、テーブルに頬杖をついて窓の外を見やった。外は闇で覆われている

「リリー」

「……何？」

不機嫌そうな声。

食器を洗い終わったリリーの後を追ってみると、屋上に着いた。

リリーは屋上で星を見るのが好きなのだ。

俺は階段の最後の一段に足をかけ、リリーを見る。

この角度からではリリーの表情は全く見えない。ただ、星明りに照らされている綺麗な銀髪が淡く浮いているように見えた。

屋上の真ん中に膝を抱えて座っているリリーは星を見上げているようだ。

「隣、いいか？」

「……いいよ」

そっけない返事で返される。

俺は内心ため息をつきながらリリーの左隣に腰を下ろした。そして胡坐をかいて左ひざに肘を乗せてリリーの顔を見る。

やっぱり『あの表情』をしている。膝の上に顎を乗せ、少しだけ

唇を尖らせたリリーは俺を全く見ない。

「リリー」

「何」

「なんでそんな顔してるんだ？」

「……は？」

リリーは拍子抜けしたような声をあげた。そして俺の顔を見て、自分の顔に手を当てる。

「あたし、そんな顔してた？」

「うん。してた」

しばらくリリーは顔に手をあてたまま固まり、そしてやっと息をついた。

息をついた後、リリーは目を少し伏せて俺から視線を外す。

「単に、子供が嫌いだからってわけじゃないだろ？」

「……別になんでもない」

そう言い捨てるとスツと立ち上がり、家の中に戻ろうと少し乱暴に歩き始めた。そんな相方の手首をつかむ。掴まれた反動でリリーは後ろによろけたが、次の瞬間には俺をすごい形相でにらんでいた。

「何すんの」

「何って。はぐらかさないで言えよ、リリー」

「はぐらかしてないっ！」

俺から逃れようと必死に腕を動かそうとするが、そこは女。力で俺に勝てるはずがない。

掴まれたまま今度は上目遣いでにらんできた。

「……誰にも言わないでよ」

「俺が『言つな』って言ったこと、誰かにばらしたことがあるか？」

「……」

呆れたように言った俺にリリーは視線を外して少しムツとした。

「言っから離せ」

「言ったら離す」

「はあ!？」

「いいから言えって」

掴んだ手は離さないまま、俺は力だけを緩めてリリーにそう促した。

風が冷たい。やっと春になったばかりでまだ冬の寒さを含んでいる。冷たい風に少し身震いしたリリーは俯きながらぼそぼそと告げた。

「クレイはまだ子供だから……なんか……父さんが捕られるような気がして……」

「は？」

「だからっ」

思わず拍子抜けして出た声にリリーは俯いたまま声を荒くする。

その顔は先ほどまで寒さで震えていたとは全く感じさせないほど真っ赤になり、銀髪からのぞく耳まで赤くなるほどだ。

「だから……寂しかったって言ってるの!!」

そう言い放った相手はついに恥ずかしくなったのかへなへなと座り込んでしまい、掴んでいた腕を離れた。

俺もリリーの顔を覗き込むようにしてしゃがみこむ。

「……こっち見んな」

「なんでそんな恥ずかしがるんだよ」

「だって……やきもちなんて、子供にやきもちなんて……馬鹿みたいじゃん」

リリーは俯いて頬に両手をあてて絞り出すように話します。

「ロアは小さいころから一緒だったから、別に何とも思わなかった

……でもなんか、新しい家族が増えると思うと……不安でさ」

「わかったわかった」

まだ顔の赤いリリーと向かい合わせて俺は胡坐をかいて二カツと笑ってやる。

リリーが上目遣いで見上げてきた。

「父さんはみんなの父さんだ。ミスやルイスだって血は繋がってないけど家族じゃん？ だから、リリーがやきもち焼くくらい不安

になることはないんだって。だってリリーは父さんの娘だろ？」

「……………」

リリーも胡坐をかき（ただ、短いミニスカートの裾は抑え込んで）こくと小さな子供がするような頷き方をした。

ふわりと風が吹く。さっきまでざわざわと心地いいとは言えない風が吹いていたのに今の風はさらりとしてすがすがしくなった。冷たさはあるが、酷く寒い風ではない。

リリーが不意に空を仰ぐ。俺も同じ様にした。

無造作に空にばら撒かれた星たちが淡く輝いている。

「明日も晴れるね」

「そうだな」

そんなたわいもない話をしながら明日から忙しくなるぞと心の中で気合を入れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5747s/>

---

僕らの誓い

2011年10月14日03時12分発行